

文学の効用

加 藤 周 一

今日のお話は、「文学の効用」という題にしました。というのも、近頃文学の評判が悪いからです。社会の中で文学の役割が縮小する傾向が強くなっている。大学でも文学部は今盛んに拡大しつつある学部ではないでしょう。私はあまのじゃくなので、文学の評判が悪くなり、文学はあまり役に立たないんじゃないか、つまり効用がないんじゃないかという考えがだんだん広まってきたので、その逆に「文学の効用」という題を選びました。

まず、私がここで用いる「文学」という言葉は、あとでもう少し細かく定義するつもりですが、だいたい普通日本語で言う、小説とか、詩とか、劇とか、そういう意味での「文学」に使って、「文芸」の方は、同じ意味ではなくて、「文学・芸術」を略して「文芸」と言うことにします。文学と芸術には共通面も多いので、話し向きによっては「文芸」と言ったり「文学」と言ったりもすることもある、だいたいそういうふうにご理解ください。

さて、どこの社会でも、いつの時代でも、根本的な人間の環境は三つあると思います。

一つは自然です。故郷の山河とか、故郷でなくても、山でも野原でも海でもそうです。そういう意味の自然、それは「物」の世界です。その自然の「物」に囲まれたのが一つの環境だと思います。

第二の環境はその「物」の世界とは違う環境です。他の人間、ある一人の人にとっては他人が環境ですね。もちろん大勢の他人がいるから、それは「社会」と言ってもほとんど同じことです。その「社会」が二次的に物を生み出す。例えば、建物もそうですし道路もそうです。それか

ら、そういう物ばかりでなく、組織も生み出します。国とか、県とか、あるいは学校も、学校組織として見れば自然の「物」じゃなくて、人間の生み出した組織でしょう。人間社会と、人間の作り出した対象です。それらから成っている環境が第二環境です。

第一の環境というのは純粹な「物」、木とか、岩とか、石とか、水とか、そういうもの。第二は他人及び他人の作り出したもの、第三はそのどっちでもないもの、たとえば「神」です。「神」はやはり、自分の外にある、一つの環境です。

人間生活というのはいつでもどこでも、だいたいその三つの対象、というか、三つの対象との関係から成っています。人と自然、私と自然との関係。私と他人、より大きくは私と社会、更に大きくは私と社会と社会が生み出した物との関係。第三に私と神との関係です。それらの環境と人との関係にも、いろんな関係があるでしょう。

第一環境に対する関係で、「物」について、つまり自然について、一番大きく作用するのは、科学だと思います。例えば自然科学。自然科学の知識はだんだんに増大するから、その知識が、自然と人との関係に強い根本的な影響を及ぼすわけです。そこから、その科学から、テクノロジーが出てきます。自然的環境に関する科学的知識を利用しながら、技術を改善するというか強化する。これは最近の傾向です。19世紀までは、科学からテクノロジーへではなく、テクノロジーから科学への傾向が支配的でした。

それから、2番目の他人との関係。これにはいろいろ複雑なものがありますが、そのひとつの面は、関係の規則化が便利だ、ということです。たとえば交通規則のようなものです。ある程度以上車が多くて、交差点があると、赤信号で止まるとか緑で進むとか決めた方が簡単です。いちいち他のドライバー、つまり他人の様子をどういう心理状態だろうとか、次はどういうふうに出てくるだろうとか、進むだろうか止まるだろうかと心配しながら運転すると、予想は当たることもあるし当たらないこともある。当たらなければ事故です。損害が大きい。それを回避するためには、比較的簡単な規則をみんなが守りさえすればいいわけです。

だから規則はあった方がいいに決まっているので、我々が知っているどの社会でも、というのはおよそ新石器時代段階から以後の社会という

ことですが、それらのどの社会でも、みんなある種の規則をつくっています。そうでないと、非常に大きな損害が起こるかもしれない、それを避けるために規則があるのです。

その規則は、大変外的な、こういう場合にはこうした方がよろしい、信号が赤になったら止まれというような、私の外側にある、私の意識と関係ない客観的な規則です。それを一般化すれば、法体系です。だから法的秩序というのは大事なんです。毎日車を運転しているときにも必要ですが、それだけではなくて、社会全体にとって大事です。例えば、日本社会には法律の体系があって、それは原則としてはみんなが守る。誰かが守らないと大変な損害が生じ、社会にとって巨大なコストになり得る。だから法の尊厳というのは大事なことなんです。

ところが、それだけではうまくいかない面があります。人間と社会との関係というのは、いくら法律をうまく作ってもそれを破る人間がでてくる。その破る人間に対して、また規則を作って罰する、法的対応もできるわけです。しかし、そうしてもまだ破る人間がでてくるんですね。それが増える場合もあるし、ひどい破り方をする人もでてくる。それを法的手段だけで完全に止めるのは事実上不可能です。そこで、もうひとつの条件がどうしても必要になります。

それは、そういうことは悪いことだからしないようにしようとその本人が、つまりその社会に属している個々人が考えることです。それは大きくみれば客観的な規則の体系だけれども、その客観的な規則の体系を内面化して、自分で、本当にそういうことは悪いことだと思ふ必要があるわけです。法に触れるからダメじゃなくて、法に触れることは同時に悪いことだと感じる。それこそは倫理的問題です。

倫理は法の内面化です。あるいは倫理を外面化したものが法律だと言えるでしょう。その二つのものは互いに関係している。純粹に倫理だけの、そういう社会は現実にはないけれど、あってもうまくいかないだろうと思います。やはり法的な、客観的、外面的な規則が必要になります。他方、外面的な規則だけでは必ず破る人がいるわけだから、どうしても倫理と法の両方が必要だということですね、根本的には。

三番目については、藤女子大学はカトリックの学校だということもあり、神のことにはわざわざ触れません。ただ、神との関係について一言

しておきたいのは、人と神との関係はどのような社会にもある、ということです。これはもちろん、その存在の否定も含めてですが、肯定するにしろ否定するにしろ、神と自分との関係は、あらゆる社会に必ず存在しています。

神に対する人間の態度の中心は信仰でしょう。信仰にも外面性とその内面化の問題があります。純粹に内面的な神というものはない。まあ病的な場合にはあるけれども、一般的にはないでしょう。神は自分の外にいるのです。しかし全く外にいるわけではなくて、内面にもはたらく。そこには外面性と内面性の、一種の弁証法が成立しています。そこまでは一般的に言えることだろうと思います。

まとめると、第一の関係については科学が大事です。大事すぎるところもあるけれども、まあ非常に大事でしょう。それから第二の関係、つまり他人との関係に関しては、法秩序と倫理的秩序と両方が必要です。そして第三には、神との関係は外面的であると同時に内面的である。

それでは、文芸はそれらのどういうところに位置するかというと、今申し上げたことに全部に関係します。科学は「物」に関係する。社会の秩序に関しても、例えば経済学のような社会科学は関与するけれども、主としては自然の秩序に関係します。法律や倫理は他人との関係の問題です。そして神との関係は、信仰です、内面的であると同時に外面的な関係です。

しかし、文芸はその全部に関係しています。

第一の「物」と文芸とはどういうふうに関係するか。科学の関係の仕方と違います。

例えば八百屋、あるいは果物店が売ってるレモンについて考えてみます。『檸檬』という短い小説があります。梶井基次郎という人が書いた小説です。八百屋の店頭でレモンを取って、その光沢とか、その色とか、持ち上げるとちょっと冷たい感触とか、ひとつの掌の上のレモンの感覚とその感覚が喚起する感想みたいなものです。非常に細かい、色、肌触り、温度や堅さ……しかし値段じゃないんです。値段のことを梶井基次郎は考えない。

一方、八百屋さんの立場からは、ひとつじゃ商売になりませんからたくさんレモンについて、これはこれくらいの品質で、このくらいの値

段で仕入れて売るときはこういう値段で、そうすれば商売が成り立つと考えます。そして他のことは考えないでしょう。例えば、朝の太陽が差し込んで丁度レモンに当たったときにその色がどういうふうに輝くか、なんてことを考えていたら八百屋の商売はできない。梶井基次郎の考えたことはいっさい考えないで、梶井基次郎の考えなかったことにだけに注意を集中します。梶井基次郎という詩人ないしは文学者にとってのレモン一個と、八百屋さんにとってのレモンの違いは明らかでしょう。

買い物に行く人は、だいたい八百屋さんの共犯者ですね、割においしいレモンが比較的安いってことを見れば、今のうちにたくさん買っとこうと考えるでしょう。その思考の形式、対応の基本方針は、だいたい八百屋さんの方針とよく合ってるわけです。それをもっと徹底すれば、八百屋さんの考え方は、一般に商品と買い手と売り手との関係を表しています。そういうことをつきつめていけば経済学になります。すなわち科学的なものの考え方につながっていく。八百屋さんに行き物に行った主婦は科学者じゃない。ただなるべくいい野菜、この場合レモンを買いたいと思っているだけの話なんだけれど、その延長線上に科学者の関心というものはあるのです。

梶井基次郎は全く違う、その延長線上にいない。むしろ反対方向へ進むわけです。だから八百屋さんの決して考えないことを考えるんですね。文芸というものは、科学とは別の方へ進んで行く。

物についての二つのアプローチがあります。八百屋、買い物に来た人、経済学者、科学的なアプローチ。それから、梶井基次郎の詩人的、芸術的アプローチ。そこではレモンの色が刻々と変ることが問題です。たくさんのレモンではなくて、私の掌にある一個のレモンこそが問題、対象の個別性に決定的な意味があるのです。

セザンヌのリンゴも同じです。セザンヌは小説家じゃなくて絵描きですが、セザンヌが見たリンゴは、特別な仕掛けのリンゴではない。フランスの普通の八百屋ですぐ買えるようなリンゴです。しかし、セザンヌはそのありふれたリンゴを描いて、絵画の革命を起こしたのです。ジョット以来、というのはつまり数百年以来ということですね、14世紀以来19世紀の終わりまで続いた絵画の伝統に対して、絵画的表現の原理そのものが根本的に変った。だから革命です。

どうして革命が起こったかという、セザンヌのリンゴの見方がそれまでの画家の見方と鋭くちがっていたからです。絵画革命が起こるようにリンゴを見る見方は、八百屋の見方じゃない。値段の高いリンゴと安いリンゴがありますが、セザンヌは、非常に高いすばらしいリンゴを描いたわけじゃない。ごく当たり前のものを描いて、絵画革命を起こしたのです。特別のリンゴを選ぶのは、八百屋さんやリンゴ好きのおじさんやおばさんの取り引きの問題で、画家の仕事ではありません。

何も西洋の画家に限らない。例えば禅宗の僧で、牧谿という南宋の画家が描いた柿の絵があります。これは大徳寺にある絵ですが、その柿がすばらしい。村人が柿をとって食べる、その普通の柿を描いていて、それが禅画、というよりも文人画の傑作のひとつです。

そういうのが「物」についての、文芸的アプローチです。科学的なアプローチとは、方角が違う。個物の個別性を見つめることから出発するのです。

それから、他人と人との関係。これは文学の大きな材料にもなっています。ただ、その接近の仕方が、たとえば法学者の接近の仕方と違う。別の接近の仕方をするのです。

文学の、多くの小説や劇の題材はそういうものだと思います。例はいくらでもありますがけれども、典型的な例をひとつだけ申し上げれば、ギリシアの劇団が比較的最近日本で客演した『アンティゴネー』という劇がある。これは古典ギリシアのソフォクレスの作です。簡単に言いますと、人物が三人しか出てこない。三人というより本当は二人なんです。アンティゴネーというのは王女で、王女の兄がクレオンという王に反抗して、戦に負けて死んだ。王は、死後も反逆者を罰するためにその死体の埋葬を禁じる法令を出す。クレオンは独裁的な王ですから、その命令は法律に準じる。王の命令によって社会秩序が保たれているわけです。埋葬を禁じる王の命令には法律的強制力がある。背けば死刑です。ところがギリシアの考え方では、埋葬をしないと死者の魂は宙に彷徨って、悲惨なことになるのです。だから死者は死後のことを考えてどうしても埋葬しなきゃいけない。

アンティゴネーは、兄の埋葬を禁じられた時に、兄にたいする愛情から、その死体を野ざらしに放置できない。その命令に抗してでも埋葬し

ようとします。それは非合法です。しかし野ざらしというのはあまりにも過酷です。言い分は、殺されて野ざらしにされた兄にもあったので、そう簡単には王が正しくて自分の兄が間違っていたと言えない。だから、その過酷な刑に対して反抗するわけです。法秩序が大事なのか、あるいは肉親の愛も含めて人間的な感情が大事なのか、どちらを選ぶのかという選択を迫られたアンティゴネーは、あえて埋葬を選び、その結果死刑になります。

簡単にはどっちがいいと言うことはできない種類の問題です。それが劇の主題になっている。ギリシアから今日まで、文学は解き難い問題、一方が他方に還元されないような論点の対立、おそらくは人間の条件の根本的構造に係る現実を、描き出して来た、とも言えるでしょう。

それから最後に、人と神との関係と文芸はどう係るのか。

地球上に存在した、そして今でも存在するほとんど大部分の宗教の場合には、信仰と教義の中心になる文書がありません。神聖な書というものがない。しかし大宗教、国際的な高度に発達した宗教の場合にはそれがあります。ここで「高度」と言うのは、教義が複雑かつ合理的である、それについて高度に発達した神学の体系があること、また教義と儀式のための職業的な僧侶や神官、専門家と信徒の組織が教会をつくっていることなどを意味します。そういうことの全体をひっくるめて普通、高度の国際的宗教という。典型的にはキリスト教、イスラーム、仏教などです。

そういう高度な宗教の場合には、聖書があるわけです。イスラームにコーランがあるように、キリスト教にも旧約と新約がある。仏教の場合にはどれが最高の聖書であるかを決定するのは難しいので今はそういう事には立ち入りませんが、キリスト教やイスラームのそれに対応するような聖典というものが仏教にもあります。

それらは、ある意味で文芸です。たとえば旧約聖書には詩があり、散文があり、歴史があり物語があるわけで、それは一種の文芸でしょう。高度な宗教はみんな独自の文芸を持っているだけではなくて、それぞれ文学としてすぐれたものです。

それからもうひとつ、それ自身が聖なる、つまり神の言葉ではなくても、神への賛歌というものがあります。例えばキリスト教の場合には、

ダンテの『神曲』などです。ダンテは、言うまでもなく、『神曲』によって文学的なイタリア語を作り、イタリア文学を作った人だと言われています。

それらが、神と人との関係に文芸が関係している例で、他にもたくさん例があります。

そこで、以上お話して来たことを踏まえその枠の中で文学とは何か、という定義を考えてみましょう。世間で今まで広く行われてきたのは、「文学は美しい」という、美学と関係する考え方です。文学は美しい、あるいは文学は芸術のひとつの形式であるという定義です。そういう定義を採れば、同時に芸術を定義しなければなりません。文学は芸術の形式であるが、芸術とは何だかわからない、というのでは単なる逃げ口上にすぎないでしょう。

それならば芸術とは何か。その伝統的な定義は、芸術とは美的表現である、ということです。善悪と区別しての美と醜です。そこで「美」の定義が次の問題となります。これはカント以来の有名な問題でさんざん議論されてきたことです。理屈はたくさんついています。しかし美とは何かということははっきりわからない。芸術の定義を美の方に持つてくのは無理だろうと私は思います。だいたいどこの大学でも芸術とは美的表現であるというでしょうし、今までそういうことになっていますが、それにはちょっと、強引というか無理があると思うんですね。

「美」というような多義的な概念を含む「芸術」の定義は、論理上、明瞭ではありません。また「美」をどう解釈しても、歴史的な芸術作品の現実と適合しないでしょう。殊に文学を芸術の一つの形式とし、芸術は美的表現であると主張するのは、全く説得的ではありません。

例えば、典型的な近代文学の中に、ヴィクトリア朝の英国の小説があります。その中でも『嵐が丘』などはもっとも有名なものでしょう。その『嵐が丘』を文学でないと言ってしまうと、それはまずい、少なくとも英国人はそれを許さないでしょう。そうすると、なぜ『嵐が丘』は文学なのかということになります。それは美しいからだと言えますか。英語が美しいってことはあるけど、それはちょっと些末的なことで、文体だけの問題じゃないでしょう。小説全体を、一人の人間がもつ多様な人間関係を描いているわけですから。

『嵐が丘』が描き出している情熱とか、人物の性格とか、人間同士の関係というものは、美しいのですか？ 美しいという言葉でまとめるのはむずかしいでしょう。ここに描かれている感情は複雑で、普通の意味で優美な世界とは言えないでしょう。裏切りもあるし、殺人に至るかもしれないような激しい憎悪もある、『嵐が丘』はそういうものが渦を巻いている世界なんです。これを、美しいから文学だ、と言うのはこじつけで、常識に反すると思います。

そういうことがいくらでもある。『嵐が丘』に限らず『戦争と平和』、これも19世紀の代表的小説ですが、「美しい」では片付けにくい。ナポレオン戦争は美しくはないでしょう。もっと新しい小説で言えば、トマス・マンの『魔の山』。そういう世界文学の代表的傑作と言われているものをもって、美しいからこれは文学だ、と言えるかどうか。お考えになればすぐわかると思いますが、どうも無理がでてくると思います。

絵画は、文学・芸術の一部ですけれども、絵画は美しい、と言うのもちょっと無理なんじゃないですか。ことに20世紀の、例えばベーコンの人物像は、ほとんど拷問みたいなものでしょう。拷問のシーンをとって、美しいからベーコンの人物像は芸術なんだということは、それはほとんどこじつけに聞こえませんか。

また例えば、デュビュッフエの人物像。人間の顔らしいもの、あれは綺麗でしょうか？ モデルにされた人は怒るでしょうね、もしこれがあなたの肖像だと言われたら。それは美とはあまりにも遠い。反対じゃないかと思います。シュルレアリストの仕事もそうです。現代の、20世紀絵画の代表的なものはほとんどそうです。セザンヌ以降の絵画は、「美しい」じゃまとまらないと思います。

アトリエに行って現代の芸術家と話をすると、「美しい」という言葉を、ほとんど悪い意味に使っています。例えば画家仲間について、「そうですね、彼も若いうちは活気があってよかったが、どうも近頃は綺麗になってきてね。彼の描くものはみんな綺麗すぎるよ」と言うのは、強く否定的な意味になります。

ところが学者だけが大学で芸術とは美の表現である、と言っていて、それは空理空論です。実際に生きてる芸術家に合わせてごらんください、そしてアンケートをとってごらんください、美しい、って言葉を使うか使わな

いか。誰も悪い意味以外には使わないでしょう。少くともいわゆる「前衛的な」芸術家は使いません。

私のつきあいの範囲では、美しいという言葉は今なお悪い意味じゃなく、いい意味で使ってる人は、芸術家でも、画家でもない、数学者です。数学者は使う。あるいは数学的な自然科学、例えば物理学者です。古典熱力学の体系は、あれは「優美」(elegant)だ、と言います。あれは美しい、と言う。数学者は、問題の解き方が三つある、どの方法でも解ける、しかし三つの解決法の中で、一番美しいのはこれだからこの解き方を取りましょう、と言います。美しいという言葉は、20世紀以降はむしろ数学者にまかせた方がいいのではないかと思います。数学者に、「美しい」を定義しろと迫れば多分「簡単」と答えるでしょう。複雑な解決法よりも、簡単・単純な方が美しい、ということです。

彼らは常にではないかもしれませんが、少なくともしばしば、「シンメトリー」を「美しい」と言うようです。二つのものに左右相称性がある、マイナスの粒子があったらプラスの粒子があった方が綺麗だと感じる。論理的な理由はない。世界があれば、反世界があった方が綺麗なわけです。左回りの回転があったときは、右回りの場合もあった方が世界は美しいのです。

極端な言い方をすれば、美という言葉は、数学を表現手段とする自然科学者、及び数学者自身にまかせた方がいいのではないかと思います。

それでは、文学・芸術はどうしたらいいかということになります。どういう定義をしたらいいか。

そのひとつは、かなり広く芸術を説明することのできる定義で、アンドレ・マルローが『創造の美術館』の中で言ったことです。一つは、人が今まで作らなかったような新しい形を創造すること。もう一つは、芸術家が自分自身を表現すること。これは芸術の定義として提案したんじゃないくて、美術史について言ったことです。

ヨーロッパを中心として、中世美術を作った中世の芸術家たちは、新しい形を作るために自己を表現した。目的は新しい形を創ることです。新しい形を創るとそれが自己表現になるというわけです。ところが、近代の芸術家、ことに20世紀以後の芸術家は、自己表現をするために新しい形を創る。新しい形を創るのは手段で、目的は自己表現です。中世に

は、新しい形を創造することが目的だった。誰が創造するかは問題じゃないのです。それが近代になると、自己を表現することが目的になる。それが方角の違いじゃないかということ、マルローは示唆しました。私はそれに半分賛成ですが、ここでは詳しくその問題に立ち入りません。とにかく、それは、「美」の概念を用いずに、芸術とは何かを定義しようとしたアプローチのひとつだと思います。

もうひとつの方法としては、正面から攻撃して、「文学とは何か」を定義しようとする、どうもなかなかうまくいかない、ちょっと裏からまわる。例えば、科学と文学、というものを考えて、科学でないものを、文学と主張する。あるいは、文学と宗教、というものを考える。つまり、もっと定義しやすいものを定義しておいて、それと違うものとしてだんだん文学の範囲を狭めていくという方法が、実際的には便利なのではないかと考えるのです。

今日ここで私が使うのは、科学と文学です。科学を定義することは面倒と言えば面倒なんです、文学よりは易しいと思います。だから、科学と文学、ということを考えて、科学的でないもの、科学と反対というか全く違うアプローチをするものが、文学・芸術であるというふうに考えると、かなり近いところまで接近できると思います。

そこで、科学と文学、という対照を考え、まず科学から始めます。

第一に、科学は、例えば一人の人間なら人間を考察する時に、それをなるべく単純な要素に分解します。機械はいろんな部品からなっていますが、非常に複雑な構造の機械でも、ひとつひとつの部品はわりに簡単な場合がしばしばあります。科学は観察の対象をなるべく単純な要素に分解する。

例えば医者是一種の科学技術者です。科学技術者としての医者は、病人に対して、動悸がするとか、階段を登るとき息苦しいとか、胸に時々痛みを感じるとか、そういうことが何年も続いているけれど少しずつ悪くなっているようだとか、そういう話を聞けば、これは心臓が悪いらしいという見当をつけます。そして心臓に注意を集中します。心臓に関係のないことは一応切り捨てて考えるのです。

患者がどういう職業であるとか、どういう性格であるとか、夫婦仲がうまくいってるとか、いないとか、そういうことは一切遮断するわけで

す。患者さんはそういうことを詳しく話したがりませんが、医者は我慢して話し終わるのを待って、早く肝心なところを知りたいと思っています。肝心なところとは、動悸がするのはいつからか、どういう状況のもとでするのかとか、そういうことです。直接心臓に係わることだけに関心を集中する。心臓というのは比較的簡単な部品です。血液のポンプですから、ポンプのリズムを調整する装置と、収縮して血液を送り出す筋肉とからなっています。また心臓の全体を血液で養いますから、そのための血管もあるわけです。だいたいそれくらいなもので、流体のポンプですから、そんなに摩訶不思議なものではないのです。

そのように事を簡単化して、その簡単なものを、正確に掴まえようとする、そういうのが科学的な方法です。

ところが、人間の全体が前面に出てきたときの心臓という言葉、それは英語では heart でしょう。フランス語では、パスカルが『パンセ』で使った有名な言葉ですが、le cœur と言います。パスカルの言った le cœur は複雑です。ポンプではない。そうではなくて、我々の日本語で言う、心に近い。単なる理性知性ではなくて、もっと感性的なものと感情的なものを含んだ、人間の魂のあり方みたいなものです。非常に複雑で、文学が——またおそらくは文学のみが問題にすることのできる人間なるものの中心です。

同じ heart という言葉でも、warm hearted という時の heart は、きわめて複雑で、ポンプじゃない。ところが、動悸がする時の心臓は、要するにポンプで、ポンプ以外の何ものでもないのです。それは例えば心電図を見るとよくわかります。しかし温かい心、と言う時の心は、心電図で観察するわけにはいかないし、寒暖計を差し込むというわけにもいかない、簡単な話ではありません。科学と文学とではアプローチが全く違うのです。

温かい心、の場合には、つまり文学では、個別の人の心が問題です。心一般の話ではなくて、この人の、心です。あるいは私の心。そういう心が問題なので、個人の個別性が大事になるのです。

心臓障害の場合は、医学的、科学的な立場では、個人に拘泥しないのです。病人が大統領であろうと乞食であろうと心臓の構造は同じです。そして、心電図で特定の波の変化を観察すれば、心筋障害を考えます。

大統領でも乞食でも同じで、そういう社会的役割よりも、心電図の波の形の変化の方が大事なわけです。それは万人に共通なもの、つまり普遍性そのものです。科学と、科学的テクノロジーは、そういう普遍性から出発する。普遍的でないものは捨てる。個別性には興味がないんです。なるべく単純な、普遍的な要素に対象を分解して、それだけに注意を集中することで、初めから終わりまで観察し、分析し、操作するのです。

文学はそうではない。ある人の心は、その隣の人の心と違うから面白い、面白くはないかもしれませんが、そこに小説は関心をもつ。個人の、個別的なものの、その個別性自体に注意を集中します。しかし、それだけでは終わらない。ある種の人間性には共通する面がありますから、ある一人の人の心を、深く掘り下げていけば、いつかは人間の心に共通するある性質に及ぶだろう、あるいは少なくとも近づくだらうと期待する。それが文学の目的です。

抽象的に言えば、全ての文学は、個別性から出発して普遍性へ向う運動です。その運動の方向性を文学と言い、その運動が文学を特徴づけるのです。

科学では、個別性は初めから除外します。さっき言ったように、単純ということが大事です。対象を要素に分解してその要素は単純であることが望ましい。物理学や生物学の実験では、できるだけ条件を少なくして、別の言葉で言えば変数の数を減らして、対象をなるべく単純化してから実験を始めます。科学的な実験をおやりになった方は誰でもよくご存じだと思いますが、単純なことから始めるんです。

文学はそうではなくて初めから難しい。ナポレオンの性格はどうだとか、あるいはジュリアン・ソレルの心理はどうだとか、恋人との関係はどうだとか、非常に複雑な話です。その複雑なものを、複雑なものとして考えていきます。

科学では多くの場合に観察の結果の数量化が可能で、相手が単純だからです。文学の場合には、数量化は原則として不可能です。ナポレオンの身長と体重を量ったってしょうがない。性格や心理は数量化できません。また、文学では統計的な処理ができない。個別性が問題だからです。

ところが、統計的な処理は有力な科学的な方法の一つです。科学者と

科学者でない人との間で話が食い違うのは、しばしばそのことと関係しています。科学者は、たとえば特定の薬や治療法の効果について、対象群に比べて薬を使ったグループでは90%治る、という言い方をします。しかし100%とは言わない。もし、この薬草、もしくは鍼を使えば、毛思想をよく勉強すれば、100%病気が治ります、と言うのは、科学的命題ではありません。100%という言葉は科学者は使いません。必ず何%と言う。それは対象に係るデータの確率的、統計的な処理です。そういう習慣がないと、例えば毛主席の言葉は100%病気を治す、となる。それは科学的な問題じゃないです。

そのように、科学は、情報を数量化し、統計的に処理することができて、文学はできない。ただ、文学の方は、価値判断ができます。しかも、人生にとって大事な価値判断は文学的アプローチによってしかできないのです。対人関係を統計的に扱っていたのでは、恋愛はできない。統計的な分析の結論として恋愛する、というわけにはいかないでしょう。個別の相手と恋愛をする。相手は常に複雑な人間です。彼女と別れるか、それとも一緒になろうかという時には、統計的資料は役にたちません。そういう場合には科学的なアプローチはほとんど意味を持たないでしょう。

そのことが典型的に現れているのは、男女の恋愛関係と美人コンテストがいかにか違うかということです。恋愛は、文学的アプローチでしか理解できません。この娘ではなくて、こっちの娘、という個別性。ところが美人コンテストというのは客観的でなければならない。科学という言葉の言い過ぎかもしれないけれど、半科学、準科学的な判断が必要です。胸囲とか、体重とか、背の高さとか、美人コンテストは、CGS単位による測定値の比較によって客観的に、公正に成り立ちます。しかし恋愛のような人生で大事な価値判断は、決して科学的な知識の集積ではできません。

戦後、ことにアメリカで、社会科学について強調された考えは、それを全面的に受け入れるためには難しい問題もありますが、大いに意味のあるものです。価値判断のない観察、推論、結論が科学だという。英語で言いますと valuefree です。価値と係らないもの、それが科学的な研究、科学的思考、科学的結論だということです。一応その立場を受け入

れるとして。しかし、それだけでは人は暮らせないんです。何をやってもいいって意味ですから。価値判断が人生にも、社会にも、必要です。要するに文学が必要なんです。

科学的知識は「進歩」します。それはほとんど啞然とするほど早く進歩する。その結果、知識が増大し、情報が増大する。しかし文学的な知識は根本的に増大しないんです。進歩するということもない。ギリシア劇よりも現代劇の方が進歩しているとは簡単に言えないんです。それらはもちろん違うけれども、違うってことは必ずしも進歩するってことじゃないでしょう。

あるひとつの社会が、進歩するもの、どんどん知識が増大するものだけを尊んで、進歩しない価値判断の歴史を無視すると、つまり文学の意味を無視すると、その社会は病的だと思います。もしそういう道をとれば、社会はどこへ行くかわかりません。だから私は、文学や芸術、一般に人文的な文化は、大事にしないとイケないものだと思います。学生さんが何人来るかとか、人気はどうしたとか言うことで、大学が文学部を廃止するなんてことがいかに浅薄かを考えていただきたい。そういうことは無学な、軽薄な、役人の思いつきにすぎません。人間社会にとって決定的に重要な価値判断は、生物学とか、物理学とか、あるいは経済学の中からでさえ引き出すことのできないものです。

そういった定義をふまえて、その文学の効用について、三点だけお話ししたいと思います。ひとつは、今言った価値判断に係ります。外から与えられた価値判断を一応考慮の外において、あらためて徹底的に、個別的・具体的な場合を考えて、価値判断をしなおすということです。

そのためには初めに、社会的約束の束縛から、自分自身を解放することが必要になります。外からの束縛、ことに社会的約束から束縛されないことが自由です、その自由が大事です。自由があるから責任がある。外から強制されないで、何かの行為を決断すれば、それは自由な価値判断にもとづくものでしょう。自分の自由意志で決めてやった行為の責任はとらなくてはいけません。それが簡単な不法駐車であろうと、殺人や強盗であろうと同じことです。あるいは戦争の責任でも同じ。首相は、戦争を決定したらその責任をとらなければいけない。強制されていれば別ですが、強制されていない、すなわち自由な決断に基づくならばです。

自由がなければ責任はない，自由があれば責任はある。だから，自由のない社会というものは完全無責任社会です。そういう社会の典型的な構造は臣従関係です。独裁的支配者があって，それに批判なしに皆が従うという社会の人民は，市民でも国民でもなくて，臣民です，汝臣民。汝でなくてもいい，我々臣民。臣民は，だまって従います。それに対して，自由意志で政府を支持したり支持しなかったりするのが市民です。だから市民の観念は自由と結びついています。そして同時に責任の観念とも結びついているのです。

犠牲者が多くて，過度の殺人があって，言語道断なドタバタ騒ぎですが，それにもかかわらずなぜフランス革命，7月14日が大事かと言うと，革命は封建的な臣民を市民にかえたからです。パリの市民はバスチーユを攻撃したとき市民になったのです。7月14日の前の臣民には自由がなく，したがって責任もなかった。7月14日の意味は，パリの市民の誕生です。後にはその反動としていろんなことが起こって歴史は複雑ですが，その根本的な点をはっきり理解しておかなければなりません。

自由は非常に大事で，またそれがわかるのは文学のおかげです。科学的研究からは，自由ありがたいものだということとは出てこない。それは価値判断の問題です。

二番目の文学の効用は，文学は想像力を喚起するということです。小説を読むと主人公になったつもりになります。例えばさっき言った『嵐が丘』でも『戦争と平和』でも，主人公に感情移入する。それは想像して別の人格になることです。別の人格になることは，面白いかもしれなくて，英雄の中に感情移入すれば気持ちがいいかもしれませぬ。そういうこともあります。それだけではないですね。他人の中に感情移入をすることのできる習慣は人間精神の大切な能力の一つです。例えば，そのために他人を害するという気が起こりにくくなります。相手の気持ちになってみることで，つまり殺す側じゃなくて殺される側の身になってみれば，容易に殺そうって気にはならないでしょう。相手の身になって考えるということは，多くの倫理的問題を解決します。

戦争でもそうです。メディアが，国際的紛争が起こったときに，一方だけの言い分を伝えるのはうまくない。相手側の身になって，相手から見たらどう見えるかとうことをはっきりさせ，それから落ち着いて考え

て、やっぱりこっちが正しい、と言うべきです。初めからこっちが正しいと言うだけで、相手の言い分を全然聞いていない言論から、状況を客観的に理解することは、不可能に近いでしょう。想像力の不足は致命的です。

これは決して昔話ではなくて、イラク戦争でもそうです。イラクにも幼稚園があるのだから、その幼稚園の先生の気持ちを想像した方がいいと思います。その上で、「テロ」を退治するために、テロと関係があるかわからない国の子供を爆撃で殺したり傷つけたりした方がいいかどうか、よく落ち着いて考える必要があるのです。時間が経ってみればわかるでしょうが、大量破壊兵器がイラクにあるかもしれないと言っている。まあ実際にある確率は毎日下がっていますが、とにかく、あるかもしれないし、ないかもしれない。もし、想像力があれば、大量破壊兵器があるかどうかかわからない国の子供を、爆撃で殺すことをちょっとためらうでしょう。だから想像力は大事です。

文学の三番目の効用は、死の問題と係っています。人間の生活で一番の大きな問題は、死の問題でしょう。全ての人は死ぬ。生死の問題は非常に大きいです。それに対しては、ご承知のようにいろんなアプローチの仕方があります。生死の境界にある脳死の問題などもその一つです。何をもって死とするかということです。しかしそれを越える、生き死にを超越するような経験というものもあります。ある経験が持続する時間は、物理的に見ると短いか長いかははっきりしています。しかし、ある種の経験による時間の超越は、その物理的な時間の長短が問題にならないということです。それは、その短い「今」の瞬間が、同時に「永遠」だという意味です。時間を超越するというのはそういうことでしょう。そういう経験を語るのは、科学ではなく文学だと言えるでしょう。

二つ例を引きますが、その一つは、京都の大徳寺の元祖で、大燈国師という禅僧の言葉です。これは14世紀の人です。その大燈国師の偈というのをちょっと読みますと、「億劫相別れて須臾も離れず」。億劫というのは、永遠に近い長い時間、その長い間離れていても、須臾もというのは一瞬もです、離れない。それから「尽日相對して刹那も對せず」。尽日というのは一日中。一日中一緒にいても、全然、一刻も一緒にいない。

永遠に離れていても、一瞬も離れない。それから、一日一緒にいても、

一瞬も一緒にいない。それが大燈国師の偈です。空間と時間を超越する経験の話です。文学と宗教的経験とは非常に近いことがあるのです。

それと同じような時空間の超越というのは、16世紀スペインの、十字架の聖ヨハネの詩の形でも書かれています。一瞬は永遠で永遠は一瞬。時間の超越です。同じような経験の叙述は、日本の15世紀の一休宗純（『狂雲集』）にもあります。「秋風一夜百千年」。

まとめますと、文学の効用というのは、外的な束縛から自由な価値判断のために道を開くということ。また、相手の身になる、想像力を喚起するということ。それから、時空を越える力を与えることがあり得るということ。そしてそれらは、科学的テクノロジーで代えることができない、それとは全然別の世界に対するアプローチだということ。だから文学を大事にする必要があるでしょうということです。私のお話はこれで終わります。